

農林水産大臣賞受賞

「明るく元気な“やんたん”」

いちななさんはち さと かい
受賞者 **1738 やんたん里づくり会**
つづきぐんうじたわらちょう
(京都府綴喜郡宇治田原町)

■ 地域の沿革と概要

宇治田原町は、京都府南東部に位置し、京都市都心部へは宇治市を通じて約 20 km、大阪市都心部へは約 40 km の距離にあり、地勢は北西部には大峰山を中心とする山地、南端の鷲峰山から北東及び南西に連なる山地が大部分を占めており南西部から広がる丘陵部と河川沿いの平地部に多くの谷が組み合わさって、陰影に富んだ地形を作り出している。町の地図を見るとハート形であることから、「ハートのまち」として各方面に発信している。農業は、河川沿いの平坦部に田が開け、山腹の傾斜地には茶畑が広がっており、茶生産が基幹産業となっている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

湯屋谷は町の南東部に位置し、4 つの谷筋の集落から構成されており総世帯数 130 戸からなる。宇治田原茶の栽培は、鎌倉時代に湯屋谷の大福谷から始まったとされ、さらに緑茶は、この地で茶業を営んでいた永谷宗円が摘み取った茶葉を蒸したあと手で揉みながら乾燥炉で乾燥させる「青製煎茶製法」を 1738 年に完成させ、色・味・香りに優れた緑茶製法を惜しみなく多くの人へ教え広めたことで一般的な飲み方になったと言われている。

茶とともに歴史や文化を歩んできたこと

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
組織の性格	機能的な集団等
人口等	総人口 356人 総世帯数 130戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 22経営体 個人経営体数 22経営体 団体経営体数 0経営体 (内、法人経営体数) 0経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 5,816ha 耕地面積 437ha 田 174ha 畑 263ha 耕地率 7.5% 一経営体当たり耕地面積 19.9ha

で「永谷宗円の生家、湯屋谷の茶畑、茶農家、茶問屋の街並み」が日本遺産「日本茶 800 年の歴史散歩」（平成 27 年認定）を構成する文化財として選定されている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

湯屋谷では、「日本緑茶の生みの親」である永谷宗円を顕彰するため昭和 35 年に生家を再建したが、年月の経過とともに茅葺屋根などの傷みが目立つようになっていた。このような状況では訪れる来訪客に対し忍びないと感じていた地元有志等が立ち上がり、生家の修復と活用を目的として「永谷宗円翁顕彰会」を平成 18 年に設立。翌 19 年に茅葺屋根の全面葺替を行った。この工事後、宗円生家の運営やお茶の魅力



写真 1 永谷宗円生家 改修の様子

力を発信していこうという機運が高まり『湯屋谷宗円さんの里づくり会』が平成 20 年に結成され来訪者へ生家の案内やお茶の提供を行っていた。

平成 27 年に町は湯屋谷地区の住民が地域の魅力を再確認し誇りを感じることが出来るようにと有識者を招き「やんたんの未来予想図を描こう！」と題したワークショップを開催し、農家・非農家関係なく約 40 人が参加のもと、地区の自然、景観、食文化、歴史、文化、行事、将来の姿などを議論し、地域資源の掘り起こしやおもてなしに繋がる「やんたん未来プラン」が平成 28 年策定され地域の将来ビジョンが地域住民で共有されることになった。

平成 30 年には共同製茶工場のリノベーションによるお茶をテーマにした交流拠点施設「宗円交遊庵やんたん」が整備され、その施設開設に先立ち会員を募集したところ、34 名が参加意向を示し、交流拠点施設の運営を地域住民が担う「1738 やんたん里づくり会（以下、「里づくり会」という。）」が設立され、これまでの「湯屋谷宗円さんの里づくり会」を発展的に改組することとした。

名称の理由は「永谷宗円が緑茶製法技術を開発した 1738 年。地元で慣れ親しんだ湯屋(やん)谷(たん)の呼称。湯屋谷宗円さんの里づくり会の功績を引き継ぐ。」として命名している。

(2) むらづくりの推進体制

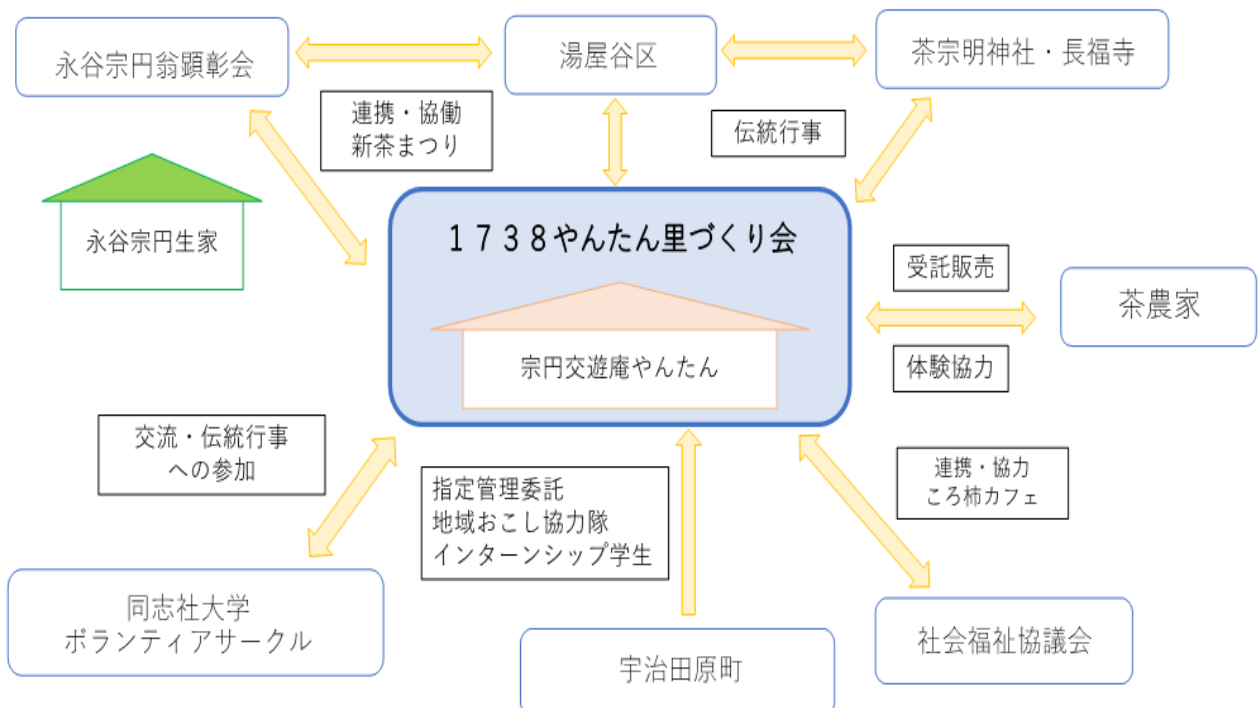
里づくり会の役員は、会長 1 名、副会長 2 名、会計 1 名、事務局長 1 名、役員 7 名の合計 12 名の他に 6 部門の部会（飲食部会、体験部会、茶農家部会、物販・展示部会、観光案内部会、宗円さん部会）を設置し、会員 34 名（男性 7 名、女性 27 名）で地域づくり活動を行っている。活動方針は年一回の総会により事業計画を定め意思決定している。また、議題等があればその都度、役員会を開催し意思決定を行っている。各部会には部会長を置き、部会で検討された事項は役員会に諮られ決定される。なお、里づくり会や各部会の活動を会員に浸透させるため、一人が複数の部会に所属することで特定の人に偏りが生じるのを防ぐとともに持続・継続性を確保している。

第2図 むらづくり推進体制図



第3図 1738やんたん里づくり会との関係図

湯屋谷地区の関係図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

里づくり会は湯屋谷集落の住民で構成され、町の交流拠点施設『宗円交遊庵やんたん』を拠点に、6部門の部会を設置し、部会毎に様々な賑わいづくりや地域活性化の取り組みを行っている。湯屋谷地区が今日の日本緑茶製法の礎となる「青製煎茶製法」を開発した永谷宗円翁を輩出した集落であることから、「お茶」の歴史や伝統・文化、地域資源を活かした取組が特徴である。

特に会員 34 名の誰もがむらづくりに関するノウハウはなくゼロからのスタートであり、湯屋谷ならではの茶文化を広く知り楽しんでもらうため、スタッフ全員が地域資源を一から掘起こし、ガイドマニュアルの作成、各種体験プログラムによる長時間の滞在でも満喫できる内容、郷土料理を絶やさないようにするため現代風にアレンジして提供する取組などを行っている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産、販売

里づくり会は「宗円交遊庵やんたん」で、湯屋谷の知名度向上とお茶のブランド化のため独自に「やんたん茶」を販売、また、茶農家部会員が生産した茶の一部を荒茶として顔写真付きで販売することで系統出荷より高い単価販売を実現している。特に、荒茶は、あえてブレンドしないことで季節や年によってお茶の味わいに変化するため消費者からも好評である。また、お茶関連の様々な情報をホームページで紹介し、茶農家の意欲向上に繋がっている。さらに、不耕作茶園で自生した「茶の実」を美容オイルとして商品化するなど今までにない新たな取組みも行っている。

(2) 生産基盤整備による生産性の向上と後継者の確保

湯屋谷でも農家の高齢化の進展による離農や生産条件の悪い茶園で荒廃化が拡大しており、茶農家部会 6 名が、離農や経営規模を縮小する茶農家から茶園を借り受け規模拡大を進めている。

第 4 図 やんたん散策マップ



写真 2 お茶販売と茶農家の紹介

特に、大福集団茶園は、茶園造成から 50 年が経過し、茶樹の老齢化による減収に加え傾斜が 20 度前後の急傾斜地形のため、農作業の効率が悪く労働生産性の低い茶園であったことから不耕作茶畑が発生していた。このため、農林水産省の補助事業を実施（平成 27～令和 4 年度）し、ほ場の大区画化、緩傾斜化等の再整備を行ったことで不耕作茶園を解消するとともに、生産性向上に伴う農地集積・集約が図られ、地域の担い手となる後継者確保している。



写真 3 乗用型摘採機による収穫

また、新たな余剰労力を販路拡大、和紅茶などの新商品開発、有機栽培・輸出用の栽培など新たな取組を行う茶農家も見られるなど、お茶産地としての継続に向け好循環な環境が芽生えつつある。これは急傾斜茶園が数多く存在する当地域での今後の茶生産のモデル的な取組であり、周辺地域への波及効果が期待される。一方、耕作放棄の解消が難しい茶畑においては、その茶畑になる茶の実を有効利用して美容オイルを開発・販売するなど、地域資源として活用する新たな取組もみられる。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 食文化の継承・女性の活躍

飲食部会は女性会員で構成され、「あばんずきっちゃん」の運営はメニュー開発から調理まで担い、できるだけ湯屋谷産の食材等を使用するなど創意工夫しながら取り組んでいる。

（※湯屋谷では「おばちゃん」のことを親しみを込めて「あばん」と呼ぶ）

湯屋谷では、古くから農作業時の昼食にみそ玉を入れたお椀に焼いた茄子や人参、自生しているみつ葉みつばやセリを加え番茶を注いで食する「茶汁」が郷土料理として親しまれていたが、時代とともに茶汁を食べる風習もなくなってきた。このため茶汁を現代風にアレンジするとともに味噌やこんにやくなどの具材を全て手作りした飲食メニューを提供しており食文化の継承に寄与している。（令和 3 年度文化庁「100 年フード」認定）

また、「茶畑カフェ」では、茶摘み体験等に来られた方に茶畑の中で昼食を楽しんでもらうため特設の昼食スペースを準備し、お茶のおにぎりやてんぷらなどが入った特製弁当を提供している。これらの活動は、地域の女性の雇用創出や生きがいに寄与しているとともに、里づくり会に女性がなくてはならない存在となっている。



写真 4 彩の茶汁セット



写真 5 茶摘み体験後の茶畑カフェ

(2) 茶文化の理解、地域の歴史継承

『交遊庵やんたん』への来館者に対し、茶摘み体験と茶畑景観を楽しみながら食事をする「茶畑カフェ」の開催や、緑茶の手揉み体験、抹茶の石臼挽き体験、茶香服体験、京番茶作り体験等、茶にまつわる各種体験事業の実施など、茶文化に親しみを持ってもらえるような取組の工夫がみられる。

また、復元された永谷宗円生家では、実際に使用された焙炉^{ほいろ}跡を見ることが出来ることから、里づくり会では生家を訪ねる来訪者へ宗円に関するお話やお茶を振舞うなどのおもてなしをしている。また、毎年5月に「永谷宗円生家新茶まつり」を開催しており、この新茶まつりには、町内外から多くの観光客（約400人）が訪れ、地域に活気がもたらされている。

さらに、地元の小学4年生の地域学習でお茶の歴史や日本緑茶の発祥地であることや宗円生家の見学会など子供たちの親も巻き込んで行っており、自分達の住む地域の歴史・文化を知ってもらうための取組も行っている。



写真6 新茶まつり



写真7 地域学習（お茶の歴史など）

(3) 地域コミュニティ強化の取組

湯屋谷では、他の地域では無くなってしまった伝統的なお祭りが現在も継承されており、特に、江戸時代から続く行事でお盆に4つの谷の住人が四角い灯籠を飾り付け疫病退散と五穀豊穡を祈り長福寺に奉納する「灯籠張り」が行われるが、近年は地域外の人呼び込めるようなまつりに発展させるため“灯り”を取り入れた「やんたん灯りまつり」も一緒に開催することで、地域住民はもとより町外からも多くの人が訪れるなど伝統行事を一步進めた取組とすることで地域に一体感が生まれている。



写真8 伝統行事「灯籠張り」

また、「宗円交遊庵やんたん」は、地域づくりや住民活動の核となっており、「やんたんマルシェ」の開催、社会福祉協議会は高齢者の交流や孤立防止を目的に月一で「ころ柿カフェ」の開催、さらに公共交通機関が充実していない当該集落の買い物難民に対する受け皿として週1回移動販売車が来るなど、地域住民が気軽に立ち寄ることができる施設として集落の重要なコミュニティの場となっているだけでなく、生活基盤の向上や各団体の交流拠点にもなっている。